原爆投下は日本の降伏をもたらしたのか

2019.9.21

三好永作

原爆投下が戦争を終わらせた

H.S.トルーマン米大統領

「あの爆弾が勝利をもたらしたとは言えないが，戦争の終結をはやめたことは確かである」（1945年10月大統領教書）

H.スティムソン米陸軍長官

「ただ一個の原子爆弾を広島に投下し，３日後，第二の原子爆弾が長崎の上に投下されるや，ここに戦争は終わった．かくして原子爆弾は目的を果たしたのである」（『第二次世界大戦秘話』リーダーズダイジェスト選書, p.558-562）

原爆投下以外の他の要因

・米空軍の戦略爆撃
・米海軍の海上封鎖や海上からの攻撃
・対日謀略放送
・ソ連の対日参戦

この問題を考えるためには，当時の日本の状況を正確に検討する必要がある

主戦派と和平派（1）

当時の日本は，指導者層の中だけで問題が処理され，指導者層は和平派と主戦派に二分されていた

和平派（早期終戦を図る）：すでに負け戦となっており，無駄な抵抗で損害を大きくするよりは，戦争を終結すべき

米内光政海相，東郷茂徳外相，鈴木貫太郎首相，迫水書記官長

主戦派（抗戦継続を主張）：負け戦とは認めず，まだ戦おうと思えば戦えるという立場．なんらかの形で米軍に大打撃を与えて和平に有利な条件で交渉に

阿南唯幾陸相，梅津美治郎参謀総長，豊田副武軍令部総長

主戦派と和平派（２）

1945年の8月までは，指導権は主戦派が握っていた．従って，戦争終結のためには，主戦派がその主張を放棄するか，それとも和平派がなんらかの手段で主戦派を抑えて主導権を握る必要があった．

そこに原爆が落とされた．

原爆が落ちて戦争が終わったというためには，原爆投下により指導者層内での主戦派と和平派の力関係が変わったということが明確にならなければならない．

原爆投下は，和平派と主戦派にどのような影響を与えたのかを見る必要がある．

和平派は原爆投下を戦争終結のチャンスと考えた（1）

和平派のひとり迫水久常（内閣書記官長）は，「米国が原子爆弾を完成して8月6日広島にその第一弾を投下した」とのトルーマン米大統領演説をサンフランシスコ放送で傍受したとの友人からの電話連絡を受けて，「もしトルーマン放送が事実ならもう戦争はできないと思った．原爆所有国と戦っても勝目はない．原爆投下を戦争終結のチャンスにすることができる．終戦に当たって，原子爆弾だけに責任をおっかぶせればいいのだ．これはうまい口実だった」と言った（F.ニーベル，C.ベイリー『もはや高地なし』p.215-216）

和平派は原爆投下を戦争終結のチャンスと考えた（2）

鈴木貞一陸軍中将も8月7日に迫水書記官長を訪れて「原子爆弾が出現した以上は，すみやかに終戦にすべきである．これは，日本の科学技術が米国の科学技術に負けたのであって，決して，日本軍隊が英米の軍隊に負けたのではないのだから，軍としても面目のことをいうべきではない」と言っている（迫水久常『機関銃下の首相官邸』p.244）

東郷外相も8月7日の関係閣僚会議において「原爆の出現は，軍側にも戦争終結の理由を与えることになるのでポツダム宣言を基礎に終戦を考えては如何か」と発言している（外務省編『終戦史録』p.535）

主戦派「原爆恐るるに足らず」（1）

8月8日の朝刊「大本営発表（昭和20年8月7日15時30分）一，昨8月6日，広島市は敵B29少数機の攻撃により相当の被害を生じたり．二，敵は右攻撃に新型爆弾を使用せるもののごときも，詳細は目下調査中なり」

長崎に落とされた原爆についての西部軍管区司令部発表（8月9日午後2時45分）「一，8月9日午前11時頃敵大型２機は長崎市に侵入し新型爆弾らしきものを使用せり．二，詳細は目下調査中なるも被害は比較的僅少なる見込」（『資料戦後20年史』政治p.3）

8月7日の情報局部長会議で，軍部は原子爆弾使用との敵側の発表は謀略かもしれず，十分な調査をしなければ即断できず，「原子爆弾」と報道することに反対し，「新型爆弾」が報道に使われることになった．

主戦派「原爆恐るるに足らず」（2）

東郷外相のトルーマン放送に対する問い合わせに，陸軍側は「米側は原子爆弾と言っているが，そうではなく，非常に強力な普通爆弾のようだ」と答えている．（外務省編『終戦史録』p.535）

8月7日の臨時閣議で主戦派は原爆を口実とする終戦案に反対し，陸軍が広島の現地調査を行うまでトルーマン放送の内容を国民に知らせないようにと頑張った．東郷外相の原爆終戦論は文字通り一蹴された．

広島への調査団に参加した仁科芳雄博士は，8日の夕刻東京に帰り，迫水内閣書記官長に「まさに原子爆弾に相違ありません．私ども科学者が至らなかったことは，まことに国民に対して申し訳ないことです」と報告した．（迫水久常『機関銃下の首相官邸』p.245）

主戦派「原爆恐るるに足らず」（3）

8月9日の最高戦争指導会議において，軍部は，原爆一発が一市を破壊しうると知りながらなお，無条件降伏に頑強に抵抗し，「わが国はもう一戦やることができる」という従来の主張を続けた．

陸軍統帥部は，8月10日に「この種爆弾は恐るべきものでなく，我が方に対策がある」（『太平洋戦争陸戦概史』p.263）対策：①被覆，②白色着物，③防空壕．

主戦派は，原爆が落とされても戦争をやめようとはしなかった．主戦派は，原爆投下が事実とわかった後でも報道統制を行い，国民に真相を知らせず本土決戦をめざす既定方針は変えなかった．主導権は，主戦派にあった．原爆投下で戦争が終わったわけでないことは明白である．

主戦派の本土決戦計画

当時の軍部の本土決戦計画は，戦闘の足手まといになる老幼病弱者を犠牲にしてまでも，日本本土を焦土にしてまでも，天皇だけは満州の安全な場所に移し，大陸でソ連と手を組んで，その支援のもとに，国民皆兵，必殺必勝の信念を持って最後まで米国に徹底抗戦しようというものであった.

その発想からすれば，原爆が投下され都市の一つや二つがその住民とともに消滅しても決定的な打撃とはならなかった.

降伏決定の直接的要因

問題は，日本を降伏させた基本的力は何かということではなく，8月15日の日本の降伏（ポツダム宣言受諾）をもたらした決定的で直接的な要因は何かということである．1945年8月の時点で，主戦派をしてその抗戦継続の主張を断念させたもの，または，和平派をして戦争終結の主導権を握るにいたらしめたものは何かという問題である．

・天皇の降伏の意志

・対日謀略放送の成功

・ソ連の参戦

ソ連参戦が和平派に及ぼした影響（１）

ソ連は1945年8月9日午前0時に対日参戦した.

迫水書記官長はソ連参戦の報を聞き「私は本当に驚き，何度も『ほんとか，ほんとか』と確かめた．立っている大地が崩れるような気がした」．（迫水久常『機関銃下の首相官邸』p.241-246）

鈴木首相「遂に終戦の最後的瞬間がきたなと，余は我と我が胸に語りきかせ，側の迫水君に対して静かに，『いよいよ来るものが来ましたね』と語った」（外務省編『終戦史録』p.562）

当時，政府はソ連を介しての平和交渉を目論んでいたが，その道が見事に裏切られた．鈴木首相は天皇聖断方式による終戦を決意し実行することになる.

ソ連参戦が和平派に及ぼした影響（２）

和平派にとって，原爆投下でいくつかの都市とその住民が消滅したとしても，天皇制と日本の資本主義（国体）が消滅することにならないが，ソ連参戦では話が違ってくる．ソ連参戦→日本の赤化→天皇制と資本主義の否定（国体護持の崩壊）が大きな可能性として登場する．

国体護持のためには，何としても主戦派を抑えて，軍の最高首脳部をペテンにかけてでも，一刻も早くポツダム宣言受諾にこぎつけなければならなかった．

ソ連参戦が主戦派に及ぼした影響（１）

ソ連参戦が，主戦派にはっきり直接的影響を与えたことを示す資料はあまり見出せない.

8月7日の会議では東郷外相の原爆投下を理由とした終戦論が議題にもならなかったが，そのわずか２日後の8月9日の最高戦争指導者会議では，ポツダム宣言の受諾を前提として，その条件をめぐっての対立へと変化し，戦争終結へと大きく前進した.

そして大事な点は，この変化が長崎に二発目の原爆が投下されたというニュースが報告される前に起きたということである.

ソ連参戦が主戦派に及ぼした影響（２）

＜8月9日の時系列＞

ソ連の対日参戦：午前０時（ザバイカル時間）

最高戦争指導者会議：午前11時（10時30分）

長崎への原爆投下：午前11時02分

和平派の条件：国体護持（皇室の安泰）

主戦派の条件：①国体護持（天皇制），②保障占領，③武装解除，④戦犯処理の問題

最高戦争指導者会議（鈴木，東郷，米内，阿南，梅津，豊田）が始まる前に，主戦派も戦争継続を主張せず，ポツダム宣言受諾を前提に４つの条件を提示した.

ソ連参戦が主戦派に及ぼした影響（３）

なぜ，主戦派にとってソ連参戦ということが原爆投下以上に決定的影響を与えたか？

主戦派は，対米英戦（本土決戦計画のこと）を遂行するためにソ連の対日参戦阻止が不可欠の前提条件であると考えていた．そのために，日露戦争前の状態のみならず日清戦争前の状態に戻ることさえも対ソ施策案として考えていた（参謀本部編『敗戦の記録』p.347)

これは，主戦派にとって，ソ連参戦がいかに決定的打撃となると考えていたかを物語ってる．主戦派は，陸相辞任で鈴木内閣を崩壊させ有利な次期内閣を成立させることもできたが，あえてそれを行わなず，降伏を前提とした条件闘争に抵抗の力を弱めた．

8月9日から15日降伏までの経過（１）

9日の最高戦争指導者会議（11時前～13時）

１条件か４条件かで決着つかず（長崎に二発目の原爆が投下されたの報が入るが，議論に影響なし）

臨時の閣議（14時半～17時半，18時半～22時）

御前会議（６巨頭+平沼等, 23時50～翌2時30分）

天皇：軍を批判し１条件での受諾に同意と発言

和平派の陰謀が成功した

直ちに，条件付きポツダム宣言受諾が発信された.

米国は，日本政府からのこの信号を受信する（正式にはスウェーデン政府を通して）．トルーマン大統領とバーンズ国務長官は，この条件付き受諾を拒否.

8月9日から15日降伏までの経過（２）

米国からの回答（バーンズ回答）の要点

①降伏時から天皇と日本政府の権威は連合軍最高司令官に従属する．②日本の究極的な政体は日本国民の自由に表明された意思によって定められる．

バーンズ回答を受諾するかどうかで再び和平派と主戦派で激しい論議がなされた

14日２回目の御前会議（10時50分～12時）

天皇：「これ以上戦争をすることは無理と考える」
「先方の回答を受諾しても宜しい」

15日12時　玉音放送

同15時20分　鈴木内閣総辞職

２つのIF

①もし原爆投下のみでソ連参戦がなかった場合

和平派は天皇聖断方式の実行を試みたかもしれないが，主戦派の抵抗は強力で，その成功は困難であり，日本の降伏はずっと後になったと思われる．

②もしソ連参戦のみで原爆投下がなかった場合

その時には，実際に起きたこととほぼ同様なことが起き，8月15日でなくても，その数日後かそう遅くないうちに日本の降伏は実現していたと思われる．

原爆は，たんに民間非戦闘員を大量に殺戮したというだけでなく，まったく無駄に殺戮したのである．